

「日本
平成

本文学論叢」第十三号 抜刷
年二月二十日 発行

治本 明治三十八年秋冬
前等における詩文交流

越中・加賀・

柴田清継

王治本 明治三十八年秋冬 越中・加賀・越前等における

詩文交流

柴 田 清 継

はじめに

明治（以下、誤解を招く恐れのない場合は「明治」を省略する）三十八年の秋から冬にかけて、当時横濱に住んでいた王治本（号泰（漆）園。一八三五～一九〇八）は二十数年ぶりに加越能地方及び越前を訪れた。^{（金一）}その行程は、九月五日に金沢に到着して一カ月足らず滞在し、同月三十日に富山へ移動して一カ月餘り滞在し、十一月三日にいったん金沢に戻った後、また金沢を離れ、同月二十五日に再び金沢に戻って滞在し、十二月一日に福井へ移動してしばらく滞在した後、年内に福井を発って名古屋へ向かうというものであった。この時の彼の足跡は、金沢在住の細野申三や山田天籟が富山や福井でも彼と行動を共にしている点に特に顕著に表れているように、ひと連なりのものであったから、地域別に切り離すと描述するのに些かの支障が生ずるのであるが、紙幅の制約があるので、まずは先般、その金沢における詩文交流の様子までを「王治本 明治三十八年秋 金沢における詩文交流」と題する拙文にまとめ、発表した。^{（金二）}本稿はその続編に当たるもので、彼の九月三十日、富山への移動後、福井滞在までの詩文交流の様子を紹介することにした。

なお、前編で取り上げた人物については説明を繰り返さないことを断っておく。

一、富山滞在

王治本は九月三十日、細野申三とともに富山へと赴いた。これを報ずる記事が、翌十月一日、金沢の『北國新聞』、富山の『北陸政報』、『富山日報』、三紙いずれにも掲載されているが、その中から、『富山日報』の記事を挙げておこう。

高儒王治本来遊　今を去る二十年前^{ぜん}当市に来遊して田中清次郎、金山從革、内山松世其他重なる有志と文墨を俱にせし

清国浙江省寧波府慈谿県人にして有名なる儒者王治本（号泰園^マ）は昨日金沢を出発当市へ来遊富山館へ投宿せしが茲数日

間は当地^{（主）}●滞在する都合なりといふ

この文中に見える三人の日本人は、十五、六年当時の王治本の越中訪問関連の資料にはその名が見られなかった人たちである。金山と内山については後で言及することとして、ここでは田中清次郎（一八五二―一九一五）にだけ言及しておこう。この人物は、その名が『明治大正昭和　日本德行録』上巻に^{（注）}「緑綬褒章受章者　故田中清次郎氏　産業功労者　嘉永五年（中略）生」として載り、「明治十八年即ち氏が三十四歳の時、父君が不帰の客となつたので、父名清次郎を襲ひ家督を相続し、始めて紙商並に売薬業を継承した。（中略）多年富山県の産業発達の為に、多大なる功績を樹てた」という事績が述べられている。

なお、『富山日報』の記事では、この後「尚ほ同人が当地へ着、早々詠みし詩を得たれば左に掲ぐ」として、王治本の「重遊富山誌感」と題する七律が挙げられているが、転写または印刷上のミス（平仄と韻字）と思われる字句を含むので、ここには引かない。また、『北陸政報』の記事では、「（前略）王治本氏は富山市全好家の招請に応じ昨日来富したり」と述べられており、彼を招請した「全好家」が誰であるかは究明すべき問題であろうが、今のところ不明である。

(二) 十月三日の小雅筵

来富後三日目の十月三日、神通川畔の秋山亭で王治本を招いての宴席が設けられた。十月七日の『富山日報』の「王黍園と小雅筵」という見出しのある記事により、その時の様子を窺ってみよう。なお、詩句の訓読文及び「」で括った語釈は、筆者が付したものである。

清儒王黍園^{マツ}節を富城に停め（富山館に寓す）てより文士の来訪頗る繁く詩酒の徵逐に日も惟れ足らざる有様なりとか去三日の夜金山怪堂、黍園^{マツ}を江畔秋山亭に招きて小筵を張りけるが一座陶然として興酣なる頃黍園^{マツ}左の句あり

湾前流水仍悠々

湾前 流水 仍お悠々

緑酒江燈憶旧遊

緑酒 江燈 旧遊を憶う

画閣雖非風景在

画閣（鮮やかな彩色の楼閣）は非なり（以前とは異なる）と雖も風景は在り

不宜銷夏却適秋

銷夏に宜しからざるも却って秋に適せり

富城は其の曾遊の地、当時旗亭銷夏湾^{（注6）}あり神江に臨みて風光に富み兼ねて割烹に名あり、星霜二十有三、人事蒼忙夢の如し江流長へに北に流るも亭榭また尋ぬるに由なく空く雑草の離々たるを見るのみ句中銷夏の二字偶^{（注7）}往事を追思して之に及びしものなりとか怪堂又無心先生の号あり黍園^{マツ}乃ち筆を執りて云く

秋山亭上夜飛觴

秋山亭上 夜 觴を飛ばす

醉裏狂言見至^{（注8）}

醉裏の狂言 至って？なるを見る

唯是無心能脱俗

唯是れ無心なればこそ能く脱俗したれ

奇才磊落怪先生

奇才 磊落たり 怪先生

坐客島田神水画を善くし竹に妙を得たり、酔後筆を揮へば幾竿^{（注9）}の琅玕〔竹〕箋上に生動す黍園題して云く

多年揮禿筆 多年 禿筆「大したくない書画の才」を揮いしも

愧以画工論 画工を以て論ずるを愧ず

枝葉空形似 枝葉 空しく形似するのみ

墨君還不言 墨君「墨竹の雅称」は還お言わず

更に又云く

風梢雨籜耐寒冬 風梢 雨籜「タケノコ」 寒冬に耐え

筆底神来淡又濃 筆底 神 来りて 淡く又濃し

不讓冬心誇独妙 冬心の独り妙なるを誇るに譲らず

野中復有一金農 野中 復た一金農「金冬心」有り

蓋し此日黍園、怪堂を訪うて金冬心「清、錢塘の人」の幅を看、感する処ありしを以てなり、一座四人、風流の談、忘形の交りに時の移るを知らざりきと亦近來藝園の佳話と謂ふべし

金山怪堂（一八六四—一九三六）は、従革が名で、怪堂はその号。「少年期金沢に住んでいたイギリス人ウイルキンソン家の書生として英語を学び、中国公使館随員で書家の楊守敬に師事して漢学を修め」、その後、政治家・実業家として身を立てた。島田神水は、亀谷龍二・橋米次郎編『越中古今詩鈔』に島田信太郎という名で作品が掲載されている人物と見られる。^{（注6）}『百花欄』第二十四集臨時増刊（三十八年一月一日）には「富山十八家」の一人、十二銀行員としてその名が挙げられている。当時、三十五歳だった。

記事の末尾に、この日、王治本が怪堂宅を訪れた旨記されているが、怪堂は「おびただしい骨董漢籍を蒐めて」おり、それらを別宅「寄枕野堂」に置いていたという。^{（注9）}翌三十九年五月に富山を旅した土居香国が寄枕野堂を訪ね、「去訪怪堂寄枕野堂。

匾梧竹翁書、記王泰園所作。「去きて怪堂の寄枕野堂を訪ぬ。匾は梧竹翁の書、王泰園の作る所と記せり。」と書き残している。^(註10)

(二) 十月七日重陽節 湖海吟社例会及びその前後

この年は、陽暦の十月七日が古重陽であった。この日を含め、その前後の作品も見てみることにしよう。
十月十四日の『北陸政報』に載るのは、重陽前日の作である。

重遊富山即事之乙巳^(註11)重陽前日^{ママ} 坐園^{ママ} 清国 王治本

白首豪遊向子平 白首にて豪遊す 向子平

尋煙重到越中城 煙を尋ねて重ねて到る 越中城

公園樹色三種冷 公園の樹色 三種 冷ややかに

神水石梁百尺横 神水〔神通川〕の石梁 百尺 横たわる

翰墨幾家留旧蹟 翰墨 幾家か旧蹟を留めたる

屢臺^(註12)随处認新宮 屢臺 随处に新宮を認む

相逢好有当年友 相逢^{まさ}う 好に当年の友有り

携手旗亭倒一觥 手を携え 旗亭にて 一觥を倒けん^{かたむ}

初句の「向長」、字は子平は、『後漢書』逸民列伝に取り上げられている人物であるが、その晩年「意を肆にし、(中略)五嶽名山に遊」んだことを王治本は自分の生き方に重ね合わせているのであろうか。

七日、重陽の日の会が湖海吟社の例会を兼ねて開かれることになった理由は、十月六日の『北陸政報』の次の記事の中で説

明されている。

来る十五日富山市桜木町秋山亭に於て聞く筈なりし湖海吟社の例会は明七日に繰上げ目下来富中なる清儒王治本氏を招聘するよしなるが当日の全幹事は吉川江邨 稲垣外山の両氏なりと

吉川江村は、名が安、詩を木蘇岐山に学んだ人。^(注13) 稲垣外山は、名が復。^(注14) 『百花欄』第二十四集臨時増刊では「富山十八家」の一人に挙げられており、富山橋北銀行員、三十八歳であった。

湖海吟社は、木蘇岐山（一八五七―一九一六）に師事した小倉正恒（一八七五―一九六二）の記すところによると、岐山が二十五年ごろ島田湘洲・内山外川らと富山に興じたものである。^(注15) 島田湘洲（一八五〇―一九〇七）は、名が孝之、立憲改進黨系の自由民権運動家であった。二十三年の第一回衆議院議員選挙に当選、以後三十年まで四選を果たした。また、三十五年から改進黨の『富山日報』社長として地方文化の開発に尽くした。^(注16) 内山外川（一八六四―一九四五）は、名が松世。十五年秋、王治本が訪れた神通川畔宮尾村の富家、内山家（当時は十九代の年彦）の二十代。書家・政治家・実業家として活躍した。^(注17)

外川の編集に成る湘洲の詩集に、この重陽の秋山亭における宴会時の作があるので、それをまず見てみよう。

十月七日古重陽邀飲王漆園・李雪岳両翁于秋山亭、偕岐山・外川・呉江・神水・藍田・仁里・天籟・旭泉・金湯・外山・耕村・江村・希仙・如癡・詩竹賦得樓暉二字

眼中李白与蘇欧 眼中 李白と蘇欧と（李白・白居易・蘇軾・歐陽修か）

文酒留連共勝游 文酒 留連し 勝游（快適な遊覧）を共にす

憑仗詞人賦黃菊 詞人に憑仗（頼む）して黄菊を賦せしめ

満城風雨上江楼

満城の風雨^(注18) 江楼に上る

如是勝游相值稀

是くの如き勝游は 相值うこと稀なり

重陽風物特依依

重陽の風物 特に依依たり

顧余病骨秋来健

顧えば余が病骨 秋より^(注19) 来健やかに

放眼江山恋落暉

眼を江山に放ちて 落暉^(注20)を恋う

詩題にある通り、この宴には王治本だけでなく、李雪岳（一八五八―一九一六）も招待されていた。この人物については、木蘇岐山の『五千卷堂集』巻七「答韓人李雪岳并序」詩の序に「雪岳名斗璜、韓国前訓練隊長正三品、建陽乙未之変、逃難我国、売文為活（下略）」とあるのが参考になる。「建陽乙未之変」とは、一八九五（明治二十八年）年に起きた、いわゆる閔妃事件で、閔妃殺害に関与した嫌疑を受けたため、日本に避難してきていたのである。来日後、各地を巡り歩き、詩文交流を行っていた。^(注21)

その他、詩題に見える人物について簡単に触れておこう。木蘇岐山は美濃の生まれで、各地を転々としたが、二十五年、越中小杉に移り住んで月三社を設け、また、上述の通り、富山では湖海吟社を興す等、「北国の詩風に影響するところ大きかった」人物である。^(注22) 呉江は『越中古今詩鈔』坤四十一丁にその作品が載る沢田平のことかと思われる。作品は「辛酉元旦」という題で、

一九二一年の作であり、その自注に「予齡届七十」とあるから、一八五一年の生まれか。藍田は岡崎佐次郎、婦負郡鵜坂村の人で、三十六年に郡会議員になっている。^(注23) 『百花欄』第二十四集臨時増刊で「富山十八家」の一人として挙げられ、婦負郡会議長、

四十五歳となっている。仁里は半井尚暢。この人も『百花欄』第二十四集臨時増刊で「富山十八家」の一人として挙げられている。富山県農工銀行支配役で、四十七歳。天籟は『越中古今詩鈔』坤二十四丁に見える上新川郡濱黒崎村の人、宝田正美か。あるいは金沢から来た山田天籟（後述）かもしれない。旭泉は前掲書坤一丁に見える婦負郡朝日村中道寺の主僧、五十嵐成満か。金湯の「湯」は「陽」の誤りかもしれない。もし然りとせば、大西金湯のことかと思われる。^(注24) この年の十一月二日の『富山日

報』に王治本・金陽・細野申三の三人が内山外川に招待された時の記事（後述）があるから、この日より前に金陽は富山に来ていたことになる。^(注24) 耕（畔）村は婦負郡杉原村の人、山田重穆。^(注25) 江村は富山の人、吉川安。^(注26) 希仙は金沢から同行した細野申三。如癡は若杉彦太郎。土居香国が翌三十九年五月二十一日、光厳寺（富山市五番町）でこの人に会っている。^(注27) 詩竹は中新川郡五百石町の人、橘有隣、別号勉斎、香園。^(注28)

岐山は大阪で会って以来、この日、王治本と二十年ぶりの再会だったようである。この文宴での彼の作がある（『五千卷堂集』^(注29) 卷七所収）ので、見てみよう。

古重陽、秋山亭文宴、与王泰園話旧

廿年契濶感秋蓬 廿年 契濶 秋蓬（風に吹かれて飛ばされる秋の蓬）に感ず

壳賦依然西復東 賦を売り（いわゆる壳文の意）て 依然 西復た東

磨蝸命宮非我独 磨蝸命宮 我独りのみに非ず

觀河面皺与君同 河を觀て 面 皺よるは 君と同じ

途窮歌哭詩千首 途 窮まりて 歌い哭する 詩千首

菊候風流酒一中 菊候の風流 酒 一たび中たる

後会不知何地是 後会は 知らず 何れの地かはれなる

夜闌話旧両燈紅 夜 闌にして 旧を話せば 両燈 紅なり

難解であるが、幸い、『五千卷堂集』には岐山の門下生、石野徹（香甫）による詳細な語注が付してあるので、それを参考に
五点の説明を加えておこう。一、「磨蝸命宮」。「磨蝸（宮）」は星宿の名。身・命がこの星宿にある者は常に苦難が多いとされた（都

穆『南濠詩話』『韓文公詩曰……』の一節。二、「観河面皺」。波斯匿王がガンジス川を眺めているうちに、物悲しい気持ちになって、髪が白くなり顔にしわが寄ったが、ガンジス川は不変であつたというブッダ時代の故事（『首楞嚴經』卷二）を踏まえた表現。三、「途窮歌哭」。晋の阮籍が常にただ一人、あてもなく車に駕し、袋小路に行き当たると慟哭して帰つたという故事（『魏氏春秋』）を踏まえた表現。四、「菊候風流酒一中」。「菊候風流」は清の厲鶚の「夏秋之交臥疾南湖草堂、辱竹溪沈六幼牧以佳句三首見寄、如数奉答」詩の第三首第六句に見える語句。「酒一中」は、禁酒令が布かれていたとき、三国魏の徐邈がこっそり飲酒して酩酊し、問い質されて、「聖人（澄んだ酒）に中たつた」と答えたという故事（『三国志』魏書本伝）を踏まえた表現。岐山がこの文宴で飲酒を楽しんだことのみならず、王治本の人柄に心酔したといった意味も込められているかと思われる。

十月十五日の『政教新聞』文苑には、天籟山田重光の「乙巳古重陽湖海吟社小集、分韻得「疎然」二字、是日黍園先生亦在籍」と題する作が掲載されている。この作品があるからには、山田天籟はこの日、富山に来ていたのである。上述の文会の一連の出席者中の「天籟」はやはり山田天籟と見るべきかもしれない。また、彼は湖海吟社の社員であつたのかもしれない。

その他、十月十五日の『北陸政報』に橘詩竹の「十月八日諸同人邀飲王黍園・李斗璜両先生於秋山亭、余有故不能賦之以」と題する作が載っており、重陽節の翌日にも湖海吟社の同人たちが王・李の二人を招待する宴会が催したことが分かる。

（三）十月十一日 島田湘州に招かれて

島田湘州が十月十一日、王治本と細野申三を秋山亭に招いたときに詠まれた作品の書幅を、曾孫の島田政啓氏が所蔵しておられる。それを拝見する機会に恵まれたので、ここでその内容を紹介しよう。

この書幅は、①王治本の七絶の連作四首、②これに対する湘州の次韻の作一首、③同韻による申三の「風光好」詞一闋、④申三の作に和韻した王治本の「風光好」詞一闋の順に揮毫されている。①②③は、いずれも石鼓文で書かれており、細野申三の筆に成るものと見られる。④は王治本の筆跡である。なお、①は「乙巳之秋十月仲一島田湘州詞兄招飲黍園先生秋山亭醉餘

成疊韻絶句四章」と題されており、一見王治本以外の人物の作のような印象を与えるが、これと全く同一の作が十月三十日の『北陸政報』に「乙巳之秋十月仲一島田湖州詞兄招飲余於秋山亭、醉餘成疊韻絶句四章」という題で、王黍園の作として載っている。書幅の「黍園先生」の四字は、申三が王治本の作を筆写する際に、第三者の立場に立つて書いたために、こうなったものと考えられる。唱和の順序からしても、ここには王治本の作がないと不自然である。

さて、①②③を挙げることにしよう。

①乙巳之秋十月仲一島田湖州詞兄招飲黍園先生秋山亭醉餘成疊韻絶句四章

最佳風景晚晴天 最も佳き風景 晩晴の天

江上秋波似画妍 江上の秋波 画に似て妍し

野渡不揺牽索渡 野渡にも揺れず 索を牽いて渡り

行人穩坐過前川 行人 穩やかに坐して 前川を過ゆ

落霞映水水連天 落霞 水に映じて 水 天に連なり

水色霞光分外妍 水色 霞光 分外に妍し

指点橋西煙樹碧 指点（指さす）すれば 橋西 煙樹 碧に

吳山一帶隔神川 吳山（吳羽山） 一帶 神川（神通川）に隔てらる

悠悠秋水共長天 悠悠たる秋水 長天を共にす

暮色迷離淡更妍 暮色 迷離たり 淡くして更に妍し

羨煞香魚風味好

羨煞す 香魚 風味 好きを

把竿我欲釣長川

竿を把りて 我 長川に釣らんと欲す

酒綠鐙紅別有天

酒は緑に 鐙は紅にして 別に天有り

美人顔色似霞妍

美人は顔色 霞に似て妍し

青樓隔在西江上

青樓は隔てられて 西江上に在るも

風送歌声過野川

風 歌声を送りて 野川を過えしむ

②湘州詞兄次韻

滿江秋水漫長天

江に満つる秋水 長天に漫り
みなぎ

雨後青山晚霽妍

雨後の青山 晩に霽れて妍し

鉄鎖不揺舟繫岸

鉄鎖 揺れず 舟 岸に繫がれたり

何人呼渡立前川

何人か渡〔渡し舟〕を呼びて 前川に立てる
(金31)

③余亦倚韻填「風光好」一闋

午晴天

午晴の天

暮晴天

暮晴の天

秋水盈々碧似烟

秋水 盈々として 碧 烟に似たり

短亭前

短亭の前

風揺酒燭簾影碎　風　酒燭を揺らして　簾影　碎け

人將酔　人　將に酔わんとす

檀板一声月満川　檀板　一声　月　川に満ち

夜光妍　夜光　妍し

③の後は「酔歩珊々帰寓、風雨交鳴、孤燈明滅」との識語があるので、宿舎に帰った後で詠まれたものと考えられる。王治本も申三と同宿していたはずであるから、やはり宿舎で申三の作を見たうえで④の作を詠んだということになるだろう。「読申三詞兄「風光好」一闕、不覺神移、倚詞効境以博　一粲」という題である。書幅の末尾には「書奉／湘州詞兄大人雅政／彰園老人王治本時年七十有一　㊦」と記されている。書幅完成後、あらためて湘洲のもとに届けられたものと考えられる。

(四) その他の会合

その他、催された日には不明だが、王治本を招いての会合が『富山日報』に二件報じられているので、取り上げたい。

(一) 内野梅迂主催の風雅会

梅迂と号した内野信一（一八七四―一九二八。開拓者。大沢野耕地整理組合組合長）が催した「風雅会」が、十月三十日の『富山日報』に「秋山亭の風雅会」という見出しで報じられている。これを紹介しよう。記事はまず、

当市の内野梅迂山人は此程清儒王黍園を主賓とし四方の雅客を招きて神通江畔秋山亭に於て一席の茶筵を開き半日の閑を消しけるが来会者無慮百数十に上り近來稀有の雅会として好事者の羨称措かざる処なり当日排陳せられたる器什は孰れも秘蔵の逸品にして実に左の如くなりき

と述べて、第一席（明の曹有光の仙館幽居の図等）、第二席（盆栽等）、第三席（亀田鵬斎の水墨山水等）、第四席（石莊山人の疎林遠岫の図等）、第四席副席（浦上春琴愛蔵の班竹の机等）、それぞれの「秘蔵の逸品」を紹介している。なお、第三席には、この日招待されていた日本画家、浅井柳塘（一八四二―一九〇七）所蔵の茶器等も含まれていた。この後、同記事は「当日席上王黍園^{マヤ}の記あり云く」として、王治本の筆に成る次の文章を掲げている。

秋山亭茶筵記

内野梅迂君、風雅士也。聯翰墨之良縁、修湯甌之韻事。暫分酒座、品取酪奴、恰愛水亭、嘗来森伯。適是日秋高气朗。喜此間水秀山明、開画閣以延賓、仮繡屏而分座。洞天石畔、並列名花、疊嶂画前、紛陳古鼎。金爐乍沸、珠履紛来。（中略）香浮碧乳、嫩煮綠芽、可以清詩腸、可以換凡骨。此味唯為玉泉子所深嗜、非陶大尉所能知也。余何人也、得与斯会、賞雲龕之樂事、垂藝苑之佳談。幸何如之。（内野梅迂君は、風雅の士なり。翰墨の良縁に聯なり、湯甌の韻事を修む。暫く酒座を分かち、品ごとに酪奴を取り、水亭を恰愛し、森伯を嘗め来る。適たま是の日 秋高く気朗らかなり。此の間の水秀で山明らかなるを喜び、画閣を開きて以て賓を延き、繡屏を仮りて座を分かち。洞天石畔、名花並列し、疊嶂画前、古鼎紛陳せられたり。金爐乍ち沸くや、珠履^{あじろ}紛て来る。（中略）香 碧乳浮かび、嫩く^{やわらか}綠芽を煮れば、以て詩腸を清くす可く、以て凡骨を換う可し。此の味は唯玉泉子の深く嗜む所たり、陶大尉の能く知る所に非ざるなり。余は何人ぞや、斯の会に与かり、雲龕の樂事を賞し、藝苑の佳談に垂^{もと}むるを得たり。幸い何か之に如かん。）

この後、「浅井柳塘も亦詩あり云く」として七絶二首が掲げられ、「実に藝苑の佳譚として後に伝ふべきなり」との言葉で締めくくられている。^{（注33）}

（2）内山外川に招かれて

内山外川が王治本・大西金陽・細野申三の三人を秋山亭に招いた際、「秋山旗亭」の四字で分韻して各人が賦した作が、

十一月二日の『富山日報』文苑に載っている。まず王（秋）・大西（山）・内山（旗）のそれぞれ七絶四首、次に細野の菩薩蛮詞（亭）とこれに和した王の作の順に配列されているが、王の七絶四首全部、大西と内山は各三首、菩薩蛮は二首とも掲げることしよう。

内山外川詞兄招飲秋山亭、以秋山旗亭四字分韻、拈得秋字 王治本

賞罷重陽^{マヤ}已暮秋 重陽を賞し罷われば 己^{すで}に暮秋
尋詩又醉酒家樓 詩を尋ねて又酔う 酒家の樓
為嫌入夜寒風峭 夜に入りて寒風峭^{きび}しきを嫌うが為に
簾幕垂々不上鉤 簾幕 垂々たり 鉤^かに上げず

一雨初晴夜色幽 一雨 初めて晴れて 夜色 幽に
蘆花瑟瑟水悠々 蘆花 瑟瑟として 水 悠々たり
扁舟不渡人声静 扁舟〔小舟〕渡らず 人声 静かに
幾点漁燈傍岸浮 幾点かの漁燈 岸に傍いて浮かびたり

秋山亭上者番游 このたび

聊藉吟尊遣客愁 聊か吟尊に藉^よりて 客愁を遣る
醉後憑欄情脉々 醉後 欄に憑れば 情 脉々たり
待看残月上山頭 看るを待つ 残月 山頭に上るを

分題拈韻逞風流
無限幽情筆底收
攪亂詩魂誠惡客
厭聽隔坐美人謳
題を分かち韻を拈りて 風流を逞しくし
無限の幽情 筆底に収む
詩魂を攪乱するは 誠に悪客〔招かれざる客〕
聴くを厭う 坐を隔てて 美人 謳うを

得山字 大西金陽

神江十里水潺々
一座旗亭隔市闌
領略吳山秋色淡
宛如画意仿荆関
神江 十里 水 潺々たり
一座の旗亭 市闌に隔たる
領略〔見て味わい感じ取る〕す 吳山 秋色 淡く
宛も画意 荆関〔五代の画家荆浩・関仝の師弟〕に仿うが如し

晚来倚檻看雲還
欲写秋容下筆難
鱸美蟹肥風味好
幽情聊寄酒盃間
晚来 檻に倚りて 雲の還るを看
秋容を写かんと欲するも 筆を下すこと難し
鱸は美しく 蟹は肥えて 風味 好し
幽情 聊か寄せん 酒盃の間

雪峯萬丈奈難攀
為恨老来腰力慳
摹取崔巍雲際影
雪峯 萬丈 攀じ難きを奈せん
為に恨む 老来 腰力 慳きを
崔巍たる雲際の影を摹取り

擬拈禿筆写名山

禿筆を拈りて名山を写かんと擬す

これらの作には王治本の「絵情絵景、真箇詩中有画（情を絵き景を絵く、真箇「詩中に画有り」なり）」との評が付されている。画家金陽、面目躍如たるものがあつただろう。次に内山の作。

得旗字 内山外川

尋盟鷗鷺訂幽期 盟を鷗鷺に尋ねて 幽期を訂め
九日曾茲載酒随 九日 曾て茲に 酒を載せて随いぬ
今夕江楼重買醉 今夕 江楼 重ねて酔いを買え（痛飲する）ば
明燈素壁読君詩 明燈 素壁 君が詩を読む

滲緑青春感少時 緑にじ滲む青春 少き時に感ずるも
到頭剩看髻成絲 頭いまに到つては剩お看る 髻 糸と成れるを
可堪風月廿餘歳 堪う可けんや 風月 廿餘歳
一盞秋燈重問奇 一盞の秋燈 重ねて奇を問わんとは

明月吹笙憶牧之 明月に笙を吹けば 牧之を憶う
揚州劫後鶴帰遅 揚州 劫後 鶴 帰ること遅し
陌頭揚聊空斜日 陌頭ママの揚聊 空しく斜日

只看一亭飄酒旗　只看一亭　酒旗飄るを

内山が意識していたか否かは不明だが、杜牧と揚州、さらにその劫後（匪賊による劫略）の様子に至るまでを詠み込んだ作品としては、南宋の姜夔が金軍による侵略後十五年たった揚州を訪れて詠んだ詞「揚州慢」がある。内山のこの作品は王治本を鶴にたとえ、彼との再会を待ちわびている間に、自らも晩年を迎えてしまったというような心境を詠んだものと解することができ、が、「劫」という表現を重く受け止めるなら、それは日清戦争あたりをたとえているということになる。

次は細野と王治本の「菩薩蛮」。

得亭字調寄菩薩蛮　細野申三

秋雨乍歇川流急　秋雨乍ち歇みて　川流急に

吳山日暮寒烟碧　吳山　日暮　寒烟碧なり

灘角小魚肥　灘角　小魚肥え

沙禽掠水飛　沙禽〔砂浜に住む水鳥〕水を掠めて飛ぶ

詩人多愛酒　詩人は多く酒を愛し

身似黃華瘦　身　黃華〔菊〕の似く瘦せたり

覓句上旗亭　句を覓めて旗亭に上るも

醉多詩未成　酔い多くして　詩　未だ成らず

和申三兄韻

王治本

当年歌管声如沸

当年 歌管 声 沸くが如く

天上楼^{マツ}上多佳麗

天上楼^{てんじんろう}上 佳麗多かりき

崔護者番来

崔護 者番来れば

桃花変緑苔

桃花 緑苔に變じたりき

旧題壁上詩

旧壁^{もと}上に題せし詩

化作劫塵飛

化して劫塵と作りて飛びたり

賸看一旗亭

賸^{あが}お一旗亭を看れば

風颺帘影青

風颺^{あが}りて 帘影青し

この作品は全体として『本事詩』情感のいわゆる「人面桃花」の話を踏まえる。「天上楼^(金34)」は、王治本が二十三年前の富山滞在時、しばしば遊んだ料亭「天人楼」の誤りと思われる。

二、再び金沢へ

十一月一日の『北國新聞』に「王黍園詞宗の再遊」という見出しで、「富山県下漫遊中の王季園^{マヤ}詞宗は三四日中に再び来沢し前寓所なる殿町細野申三氏方に暫時滞在、詩文書の依頼に応ずべしと云ふ」という記事が載り、三日の『富山日報』には「清儒王治本出発」という見出しで、「今日金沢市に向け出発、同市殿町細野申三方に一カ月餘滞在の筈なり依頼の詩文にて出来

上らざる向は同地より本人へ送附すべし」という記事が載っている。そして、六日の『北國新聞』には「王泰園詞宗の近什」という見出しで、一日の記事とはほぼ同内容のことを記したうえで、「氏の近什二律左の如し」として、金沢へ向かう車中で詠まれた富山諸友への留別詩が掲載されている。

乙巳小春月六日富山回程車中率成二律留別富山諸友^(注35)

多謝諸君厚愛^{まこと}忱

多謝す 諸君 厚愛の忱

相偕新旧訂茗岑

新旧 ともに 茗岑〔同志の友〕と訂^{むす}べり

詩壇文社頻番会

詩壇 文社 頻番〔頻繁〕に会し

酒座茶筵次第斟

酒座 茶筵 次第に斟む

(中略)

前遊爪跡悲零落

前遊の爪跡 零落せるを悲しむ

今日又成倦翼禽^(注36)

今日 又 成りぬ 翼倦れたる禽に

送我遠過神水潯

我を送りて遠く過ゆ 神水の潯^{みづわ}

斯情比較水尤勝^(注37)

斯の情 水に比較して尤に勝れり^{はるか}

(中略)

不尽流連文字契

流連を尽くさず 文字の契

最難消遣別離心

最も消遣し難し 別離の心

重逢未久重分手

重ねて逢い 未だ久しからずして重ねて手を分かつ

後会悠々何処尋 後会は悠々たり 何れの処にか尋ねん^(注38)

ところで、十一月三日に金沢に戻った王治本は、その八日後には東京にその姿を現している。永井禾原（一八五二―一九一三）が「古曆十月望」（陽曆十一月十一日に当たる）に、自宅来青閣（東京市小石川区）で催した集まりに参加したのである。その時のことがこの年の十二月五日出版の『随鷗集』第十五編「墨田佳話」に小青居士、大久保湘南（一八六五―一九〇八）により、「来青閣燭集」との見出しの下、記録されている。王治本がなぜわざわざ東京まで行ったのか、今のところ不明なのだが、この時点での彼の以後の心算を窺う手掛かり等も見られるので、本稿の必要に応じた範囲内でこの記事の内容を紹介したい。

この会に招かれたのは、田中夢山（名不二磨。一八四五―一九〇九）・森槐南（一八六三―一九一三）・永坂石埭（一八四五―一九二四）・岩溪裳川（一八五五―一九四三）・手島海雪（一八五九―一九〇七）・大久保湘南・王治本の面々だった。「時に海雪 塩務を以て将さに遼東に航せんとし、^(注39) 彰園も亦越中より旋り、復た重ねて越に赴むかんとす、此を以て席上の和韻往往二君の送別に言及」したという。参会者の作が数多く記録されているが、その中で、蕭韻の海雪の作に王治本が次韻した送別の作の其の一に、

紅流蠅淚冷光揺 紅 蠅淚を流して 冷光揺れ

別恨牽縈興不饒 別恨 牽縈（心にかかる）して 興 饒^{おほ}からず

君赴遼東^{マヤ}叩^{マヤ}越北 君は遼東に赴き 叩^おは越北

離歌唱徹月明宵 離歌 唱い徹^つくさん 月明らかなる宵

とあり、海雪がこれに疊韻し王治本を送る作には、

遼東越北望迢遙

遼東 越北 望めば迢遙たり

分手白雲紅葉饒

手を白雲に分かたんとすれば 紅葉饒し

秋色一尊同対月

秋色 一尊〔樽〕 同に月に対し

高吟且賞此良宵

高吟して且く此の良宵を賞せん

とあり、夢山が同じ韻を借りて王治本を送る作には、

暮簾如夢燭光揺

暮簾 夢の如く 燭光揺れたり

別恨饒於落葉饒

別恨 落葉の饒きよりも饒し

七十二橋秋欲尽

七十二橋 秋 尽きんと欲す

可憐人倚可憐宵

可憐む可き人 憐れむ可き宵に倚る

とあるのによれば、「越北」といい、「七十二橋」^(注4)といい、この会で王治本が東京の後、新潟へ向かう予定だと語っている姿が髣髴としてくる。

新潟は彼が十五年から十六年にかけて一年間漫遊した所であるが、その新潟へ再び行こうとした動機は不明である。また、実際に行ったという裏付けは、今のところ取れていない。^(注4)行っていないのではないかという疑いを強める資料もある。それは十一月二十七日の『北國新聞』の「王奎園詞宗送別会」という見出しの記事の「七尾漫遊中の清国鴻儒王治本詞宗は同地火災の爲め一昨日急遽帰沢し殿町細野申三氏（氏も詞宗と共に帰沢したるが同地に於て右足負傷の爲め静養中）方に滞在中」だという部分である。十一月十一日に東京に滞在していて、その後、七尾へ行って二十五日に金沢に戻って来た齡従心の王治本に、

七尾の前に新潟まで行く余裕があっただろうか。来青閣ではその希望を表明しただけと見るのが自然なようにも思われる。

さて、『北國新聞』のこの記事は、以下、王治本が「来十二月一日当地発にて福井へ赴くこととなりしに付明後廿九日午前四時より殿町殿待楼に於て靈沢吟社諸同人は詞宗の爲め送別会を催す由（下略）」と続く。送別会の模様は、十二月一日の同紙に「殿待楼雅会」という見出しの下、次のように記載されている。

靈沢吟社諸同人の発企にて一昨夕殿町殿待楼に開会したる三名家招待雅会は正賓王柰園詞宗、浅井柳塘画伯（中林梧竹翁は富山よりの帰期俄に延引し欠席）を始め土居香国、小池梅処、広岡尾山、吉田愚溪、石橋養元、中浜松香、平賀東吾、渡辺牧野、北方月泉、帰山芝蘭、泉谷雨声、細野申三氏等無慮四十名と注せられ近來の盛会にして席上唱和、揮毫あり酒間風流談に時を移し夜半漸く散会を告げたり

中林梧竹（一八二七～一九一三）は明治の三筆の一人、このころ北陸を巡っていたらしい。^{（注12）}既出の土居、小池、広岡、渡辺、北方、細野以外で、情報の得られた人物を簡単に説明しておこう。吉田愚溪は、中村正直（一八三三～一八九二）の『敬宇文集』に「跋吉田愚溪書」と題する文があり、その中に初め佐瀬得所（一八三三～七八）に師事したことが記されている。書家のようである。^{（注13）}石橋養元（一八四五～一九二二）は北國新聞社の編集顧問や弁護士を務めた石橋忍月の養父。「久留米より金沢に来住」、「歌をよくし、自宅で江南軒歌会を開いた」。^{（注14）}中浜松香（一八五七～一九二二）は画家。父祖三代にわたる画家の家系。^{（注15）}他の人物は未詳。

さて、同記事は「今王柰園詞宗留別の七律二首を掲ぐれば左の如し因に香国詞宗以下の次韻は改めて録する処ある可し」として、王治本の作二首を掲載している。「尤」韻の第一首だけ掲げることしよう。なお、第二首は「真」韻。

乙巳季冬将発金城赴福井饒於侯公楼賦此留別^{（注16）} 王柰園

狂遊随処似萍浮 狂遊 随処 萍の浮かぶに似たり

書劍廳零到白頭 書劍もて廳零し 白頭に到る

子畏壳文嗟末路 子畏は文を売りて 末路に嗟き

仲宣作賦倚●屢 仲宣は賦を作りて ●屢に倚る

立山晁水行将別 立山 晁水 行くゆく将に別れんとし

残月曉風易惹愁 残月 曉風 愁いを惹き易し

強自寛懷傾竹葉 強いて自ら懷いを寛くせんと 竹葉〔美酒〕を傾くれば

偏教燭淚倩人流 偏えに燭淚をば人に倩^{たの}んで流さしむ

第三句の「子畏」は明の唐寅の字。唐寅は壳文売画の生活を送った人として知られている。^(注47) 第四句は、後漢の王粲（字仲宣）が異郷で楼に登って「登楼賦」を作り、「信に美しと雖も吾が土に非ず、曾ち何ぞ以て少しく留まるに足らん」と詠んだ故事を踏まえていると考えられる。尾聯は、明るい気持ちになろうと杯を重ねるうち、傍らで流れる「燭淚」（蠟燭が燃えて、流れる蠟）につられ、意に反して自分も涙を流すことになってしまったの意か。

「香国詞宗以下の次韻」の作品、及び送別会で詠まれたと見られる他の作品が、併せて十二月二日の同紙に掲載されている。それらのうち、香国と尾山の作を掲げることになしよう。

与靈沢吟社諸同人俟公楼送王柰園先生赴福井、酒間賡其留別詩韻二律併政 香国 土居通豫

始識人生只是浮 始めて識る 人生は只是れ浮かべるのみなるを

別筵忽漫独搔頭 別筵 忽漫として独り頭を搔く

詞源 翻倒三州水

詞源 翻倒す 三州の水

筆力 応揺五嶽楼

筆力 応に揺るがすべし 五嶽楼

(後半四句省略)

第三句は、杜甫が從姪の文章の力をたたえた「詞源倒流三峡水、筆陣獨掃千人軍」(「醉歌行」)を踏まえているだろう。第四句の「五嶽楼」は福井にあつた旅館。十五年の王治本の福井訪問時、ここで「別宴」が催された。^(注48)

同 広岡尾山

無限離情杯裏浮 無限の離情 杯の裏に浮かぶ

明朝分手空回頭 明朝 手を分かつたば 空しく頭を回らすのみならん

尾山夜雨茲參坐 尾山〔金沢の古称〕の夜雨 茲に參坐し

羽水風烟ト寓楼 羽水〔福井を流れる足羽川〕の風烟 寓楼をトせん

緑酒紅燈須尽醉 緑酒 紅燈 須く酔いを尽くすべし

残楓枯柳自成愁 残楓 枯柳 自ら愁いを成す

(尾聯省略)

その他、吉田愚溪の真韻の五律「俟公樓即吟」と尤韻の七絶「送王泰園先生赴福井」が掲載されている。また、十二月七日の同紙には、「次韻土居香国詞宗与広岡尾山諸君饒王泰園先生和其留別之作先生二十年前嘗一到而今復忽々赴福井予病中悵然以此寄併請雅正」(土居香国詞宗と広岡尾山諸君の王泰園先生を饒し、其の留別に和するの作に次韻す。先生は二十年前 嘗て一たび到り、而して今復た忽々

として福井に赴く。予 病中 悵然として此れを以て寄せ、併せて雅正せんことを請う」と題する蘭疇小川孜成（一八四四～一九〇八）の尤韻の七律が掲載されている。

三十八年の金沢における王治本の足跡・活動を紹介してきたが、最後に二点追加しておきたい。

(1) 十一月十三日の『政教新聞』に王治本の「祝政教新聞二千日」と題する七絶二首が掲載されていること。当時同紙の漢詩文欄「文苑」を担当していた愛弟子、山田天籟の依頼に応じたものだったろう。

(2) 村上珍休（一八四三～？）の『函峯文鈔』^(注50)に跋をしたためたこと。珍休は小田原の出身であるが、「二十五年八月来つて第四高等学校教授となり、漢文学を担当し明治四十年九月に至つた」^(注51)人である。その跋文は次のようなものである。

余自丁丑春始客東瀛、以文酒之会獲交穀堂山長。山長不以余不文、時出近著、相与論權。山長為東都宿儒、學識淵深、文材超卓、其為文、力追昌黎・子厚之間、門下有高弟二人、神波即山以詩名、村上函峰以文名。余所欽慕者久之。今茲乙巳秋仲余客游加州、適函峰司教在加、得以重晤。一日函峰來訪、出示『函峯文鈔』、曰「近將付梓、乞為跋後」。余就而讀之、覺其製局必嚴、立言必正、凡所持論要旨皆有益時事、有関名教、^(中略)即探勝絵情之篇亦寓有敦品勸學之旨。故能不事粉飾而氣自清華、不仮鋪張而論自堅卓、其精到处直欲追步山長、洵不負師門之真伝者矣。山長去世既久、即山亦早作故。余今又得与函峰尊酒論文、感慨之餘、差堪稍慰耳。乃為之歷叙交契之忱、附書卷末、以誌仰企。^{(余 丁丑の春始めて東瀛に客たりしより、文酒の会を以て交わりを穀堂山長に獲たり。山長は余を不文と以わず、時に近著を出だし、相与に論權す。山長は東都の宿儒たり、學識淵深にして、文材超卓たり、其の文を為すや、力 昌黎・子厚の間に追ふ。門下に高弟二人有り、神波即山は詩を以て名だかく、村上函峰は文を以て名だかく、余の欽慕する所の者 之を久しくす。今茲乙巳秋仲 余 加州に客游するに、適たま函峰司教 加に在り、以て重ねて晤うを得たり。一日函峰來訪し、『函峯文鈔』を出だし示して、曰く「近ちか將に梓に付せんとす。乞う跋を後ろに為せ」と。余就きて之を讀み、其の製局^{ていぎょく}必く嚴に、立言必く正しく、凡そ持する所の論は要旨皆 時事に益する有り、名教に關する有り、^(中略)探勝絵情の篇とても亦品を敦し^{はげ}學を勸むるの旨を寓有するが故に、能く粉飾を事とせずして氣}

自ら清華に、鋪張を仮らずして論自ら堅卓にして、其の精到なる處は直に山長に追歩せんと欲し、洵に師門の真伝者に負かざるを覚えたり。山長は世を去りて既に久しく、即山も亦早く故と作りぬ。余今又 函峰と尊酒もて文を論ずるを得て、感慨の餘り、差ど稍慰むるに堪えたるのみ。乃ち之が為に交契の忱を歴叙して、卷末に附書し、以て仰企を誌せり。^(注53)

光緒乙巳小春月下澣

澗東彰園老人王治本撰并書

識語の「光緒乙巳小春月下澣」は、額面通りならば、この年の十一月十七日から二十六日までの間となるから、この跋の執筆は七尾から帰った直後かと思われる。

三、福井滞在

十二月一日に細野申三と共に金沢を發つた王治本は、その日のうちに福井に着いたであろうが、二日後の三日には王治本を招いての「雅宴」が催された。その時詠まれた作品と「蘋園令尹の雅宴」と題する記事（作品も含む）とが、福井発行の新聞『北日本』の十二月五日第一面と第三面にそれぞれ掲載されているので紹介したが、事の経緯が述べられている第三面の記事を先に引用することにしよう。

蘋園令尹の雅宴

既記の如く坂本令尹は清国文豪王泰園^{ママ}翁の来福に際し一昨三日午後四時より翁の紹介旁雅宴を三秀園（福井藩家老邸宅跡）に設けられたるが当日は主賓翁及び其随員細野某を始とし詩歌風韻を弄する文人墨客の会合の事として各種の人物を一堂に見

るを得たるは近來の快事なりし、聞く所によれば翁は今を去ること三十一年前率先して來朝せしもの今や横濱表に寓居を設け悠々詩文を弄して風月を嘲罵しつゝあり、朝野知名の紳士にして苟も詩趣雅懷に富めるものは翁と交通を為さざるものなく従ふて翁を敬愛するもの尤も多しと云ふ、翁は過般七尾及金沢に遊び目下來福して羽畔〔足羽川畔〕名和屋旅館に滞在し博く江湖の希望に応じ揮毫を為すよし翁は年齒將に六十に近く白髯禿頭の紳士なるも豐鑠として健啖加ふるに溫雅交際に長し一見尚ほ旧の如き態度を以て人に接するの風あり故に当日の雅宴も終始歡声和●の裡に成立したり、本紙第一面所報の詩作の如き各大家の詩文立ところに成りし如き、又特に坂本令尹の筆談并に翁と堯民県長の筆談若くは令尹の松原一城氏及本社龍洲の紹介筆談の如き酒間頗る興を添ゆるもの少なからず加ふるに数名の佳人杯盤に周旋して毫も遺憾なかりしが、^{さすが}遠に詩人雅客の会合とて何等絃歌の声聞かざりしは近來に於ける清宴と謂ふべし、今左に坂本令尹及び王翁並に堯民議長の筆談を掲げん

薊園令尹は坂〔阪〕本鈺之助（一八五七—一九三六）、薊園はその号。永井禾原の実弟で、当時福井県知事を務めていた。堯民県長は、この年の十一月二十日に福井県会議長に就任したばかりの大橋松二郎（一八六八—一九二〇）のこと。「松原一城」は『真宗 安心 邪正明治断概評 真宗 安心 邪正明治断続餘』という著書^{（註50）}があり、戸沢春堂編『真理之暁』第二に「會員」として「道德を論ず」という文章を書いている人物。龍洲は後出の大島龍洲か。

この後、漢文による筆談が、適宜場面の転換を示す和文の説明を挟みつつ、談ごとに改行して掲げられているのであるが、漢文を書き下し、改行はせずに、ここに掲げることしよう。もともと和文であった部分（王治本のたどたどしい日本語での発言も含む）には傍線を施しておく。

令曰く「前年の遊は何れの時に在りしか」と。王曰く「初め到るは七月、回程は次の年の三月なりき」と。令曰く「先生

旧作の満江紅をば、鷗波翁愛蔵したれども、余借覽すること之を久しくす」と。王曰く「金沢に横山蘭洲先生有り」と。令曰く「弟は春濤翁の家塾に在るの日 蘭洲先生を識りぬ。弟 福井に来るの日、先生既に亡し。悲しいかな」と。王曰く「横濱は詩人少なし。昨年弟 令兄と初めて斜川吟社を創りたれども、弟 此に遊びしより、社又停まれり」と。令曰く「家兄及び弟^{マツ} 先生と交わること此に三十年なり。萍梗相逢う。感荷ぞ勝えん」と。王曰く「賢昆仲三位皆知已^{マツ}なり」と。又曰く「金昆玉友皆詩人なり」と。坂本太守松原一城翁を介して曰く「老来 書画を学び 皆 妙に臻る」と。又曰く「鳴鶴翁に就きて書を学び、北奥に従遊したり」と。王曰く「即ち是れ東瀛の山翁・冬心先生を恋うるなり」と。坂本太守更に大橋議長を紹介して曰く「県に会議有り、事太だ繁し。堯民先生は、職 議長に在り、復た詩を思ふの閑無し。余も亦同病相憐れむ」と。王曰く「詩を以て暇を告げよ」と。堯曰く「即答し難し」と。又曰く「玉礎に攀して以て詩を成さん。期せん 明朝乞う 再び晤わんことを許せ」と。令曰く「明朝の約 若し之に愆わば、罰するに百杯を以てせん」と。堯曰く「謹んで命を奉ぜん。尚お請う 紅裙十人をして侍坐せしめよ」と。令曰く「紅裙の隊は君が率いるに任さん」と。茲に於て満坐忽然として笑声起る堯民議長尚談を進めて曰く「先生は老いたりと雖も尚お壮んなり。佳人の意に中たる者在りや否や」と。王曰く「我愛の佳人。佳人 老を愛せざるを奈何せん」と。令曰く「李花 海棠を庄するも亦可ならん」と。斯くして談益佳境に入る傍に昌谷^{さかや}県佐あり王翁の前聯を賞す坂本太守筆を探りて「県佐 尊作を誦えて乃ち云う『夷^いの思う所に匪ず』と」。尚人あり王翁の滯留日数を問ふ翁答ふるに『ワカラン』の一語を以てす、太守再び筆を探りて翁の意を介して曰く「遊 佳くんば輒ち留まれ。佳からずんば輒ち去れ」と。

「前年の遊」とは十五、十六年の福井漫遊のこと。鷗波は富田鷗波（一八三六―一九〇七^{（註57）}）。横山蘭洲（一八三四―一九三）はもと加賀藩家老。^{（註58）}春濤は森春濤（一八一九―一八九）。「令兄」とは坂本頼園の実兄、永井禾原（名久一郎。荷風の父。一八五二―一九一三）のこと。斜川吟社は、三十七年の晩秋、木村寧靜（一八三四―一九一九。横濱の貿易商）・永井禾原・王治本の提唱の下、「横濱神奈川の同人

諸子」が相謀つて創めた吟社。^(注9) 鳴鶴は近代書道界に多大なる影響のあつた書家日下部鳴鶴（一八三八―一九三二）。「即ち〱恋うるなり」の「東瀛」は「東瀛」（日本のこと）の誤りか。「山翁」は未詳。^(注10)「冬心」は金農か。全体として、松原一城が日下部鳴鶴に付き従つたのは、中国の書画人が斉白石や金農を恋慕うのに対応するような日本での事象だという意味か。「李花 海棠を圧する」は、清の劉廷璣の『在園雜志』卷一所載の老人納妾に関する絶句、「二八佳人九九郎、蕭蕭白髮伴紅粧。扶鳩笑入鴛幃裏、一樹梨花庄海棠。」（二八の佳人 九九郎、蕭蕭たる白髮 紅粧を伴う。鳩を扶えて笑いて入る 鴛鴦の裏、一樹の梨花 海棠を圧す。）に基づく。昌谷県佐は福井県事務官・第一部長兼第二部長の昌谷彰（一八七〇―一九四六）。「王翁の前聯」は王治本の第一面所載の「三秀園夜集」と題する詩の頷聯のことだろう（後掲）。「夷の思う所に匪ず」は常人の考え及ぶところではないの意。

この後、「斯くて歎興尽くる時なく各自十二分の快を貪りて終に左の聯句を得たり」として、出席者二十人による聯句が記されているのであるが、それを掲げる前に第一面「詩藻」所載の作品を紹介しておこう。

三秀園夜集

泰園王治本^{ママ}

午晴天氣乍停輪

午晴の天氣 乍ち輪を停むれば

山意相迎帶笑顰

山意（山の表情）相迎え 笑顰を帶ぶ

知已重逢賢太守

知已重ねて逢う 賢太守

慙儂猶是奮遊人^(注6)

慙ず 儂は猶お是れ奮遊人なるを

一乘飛瀑料如故

一乘の飛瀑は 料るに故の如くならん^(注12)

十月寒梅早放新

十月の寒梅は 早く放びて新たなり

満座洵是名下士

満座 洵に是れ名下の士（名にし負う人たち）

吟成詩句定通神

詩句を吟じ成さば 定めし神 通ぜん

この後、富田鷗波の「席上戲次黍園先生近作韻」と題する七絶があり、その次は高島石田の作である。

席上漫賦、呈黍園先生并正 高島石田

萬里乘槎遊日東 萬里 槎に乗りて 日東に遊び

老來詩筆倍豪雄 老來 詩筆 倍ます豪雄

今宵佳会君須醉 今宵の佳会 君 須く酔うべし

又是明朝趁雪鴻 又是れ明朝 雪鴻を趁わんからには

高島石田（一八六七～一九四五）は、その名茂平。東京高等師範学校を卒業し、福井中学校の教諭、その後、県会議員。^{（注63）}なお、石田の作は「同呈蘋園明府并正」と題するものも掲載されている。

次は蘋園、及び山本小坡の作。

酒間次黍園先生近作韻呈政 蘋園主人

任他夜雨滿階楹 他^かの夜雨 階楹に滿つるに任さん

倩玉纖々酒可行 玉纖々（美人の手の形容）に倩いて 酒 行る可し

老杜晚年筆逾健 老杜（杜甫。ここでは王治本を指す）は晩年 筆 逾ます健なり

滿囊佳句使人驚 囊に滿つる佳句 人をして驚かしめん

同呈黍園先生并正 山本小坡

一日千秋再遇遲

一日千秋 再び遇うこと遅し

馭亭握手意相怡

馭亭にて手を握り 意 相怡ぶ

記不二十年前事

記すや いなや 二十年前の事

留得北莊懷古詩

留め得たり 北莊 懷古の詩

山本小坡（一八四六—一九三二）は、名翼なつ、小坡、琴古と号し、医家。詩を富田鷗波に学んだ。（注61）詩の内容から、十五、十六年の王

の福井訪問時に会っていたことが分かる。「北莊懷古詩」とは、関義臣編『藤島餘芳統編』（三十七年）に十首のうちの一首だけ

が載る王の「北莊懷古」（注62）だと考えられるが、福井県立図書館蔵の稿本『小坡陰稿』第四冊にこの詩が記されており、王治本か

ら与えられた「懷古詩数首」を巻物にして保存していた旨の自注が付けられている。（注63）二十餘年前の二人の交流の中で詠まれた

ものであったことが知られるのである。

最後はこれに次韻した王治本の作。

次山本国手韻

王治本

流連随处到来遲

流連 随处 到来 遅きも

一得相逢令我怡

一たび相逢うを得るや 我をして怡ばしむ

茶竈葉爐無俗事

茶竈 葉爐 俗事無く

箸方餘暇又工詩

箸方の餘暇 又 詩に工なり

ここで再び第三面に戻り、聯句を掲げることにする。

乙巳臘月初三三秀園雅集席上

聯句用柏梁體

勞君為我啓(註8)討壇

勞す 君 我が為に討壇を啓くを 黍園アヲ

剪燭須永今夜歛

燭を剪り 須く今夜の歛を永くすべし 菩提

廿載重逢共倚欄

廿載 重ねて逢いて 共に欄に倚る 鷗波

如斯興會古成難

斯くの如き興會(興趣)は 古 成すこと難かりき 笙東

戶外聽到兩声寒

戶外 聽到る 兩声 寒しと 堯民

不聞菊老又楓殘

聞せず 菊 老ゆるか 又 楓 残せるかに 石田

●宵陪宴似無官

●宵 宴に陪して 官無きに似たり 虎山

醉步珊々夜●々

醉步 珊々 夜 ●々 申三

世海欲挽倒狂瀾

世海 挽かんと欲す 倒に狂える瀾 風外

道人自若鍊金丹

道人 自若 金丹を鍊る 鼎雲

神州禹域全文翰

神州 禹域 文翰(文章)を全じくす 城東

友情不復分清韓

友情 復たは分かつたず 清と韓 碧湖

紛々牛李打為丸

紛々たる牛李(派閥争い) 打ちて丸と為さん 龍州

君子之交臭若蘭(註9)

君子の交わりは 臭い蘭の若し 小坡

生平嘗画幾辛酸

生平 嘗て画きたる 幾辛酸 龍溪

一步欲進百尺竿

一步 進めんと欲す 百尺の竿 竹厓

絹素誰写竹平安(註10)

絹素 誰か写きたる 竹平安 香圃

酒気払々迸筆端　酒気　払々〔広がる様〕として　筆端に迸る　春星

我将何物供盤餐　我　何物をば　盤餐に供せん　婦峰

名園秋色醉中看　名園の秋色　醉中に看よ　蘋園

第三面の記事は、この後、次の一節を以て締めくくられる。

斯くて散会せしは午後七時過ぎなりしと云ふ、因に当日来会者の主なるもの左の如し　王黍園、細野某（主賓）、坂本令●、
昌谷第一部長、内田警視、富田鷗波翁、大橋議長、谷教諭、高島石田、鷺田鼎雲、松原一城、五十嵐某、土生笙東、須永
素菩提、中村諦梁等及び本社の大畠龍洲外数名

ここに新たに出てきた人名のうち、何らかの情報の得られるものだけ記しておこう。（素）菩提は福井新聞記者の須永金三郎（一八六六―一九三三）。須菩提、蘆山などと号した。笙東は土生笙東（一八六四―一九四三）、福井新聞主筆（註20）。風外は岸上操編『明治二百五十家絶句』に「水野風外。名昌、（中略）越前人」として見える人のことだろう。城東はすなわち谷教諭で、谷城東（一八五二―一九二六）のこと。伊勢松阪の生まれで、長年の教職を辞した後、「三十五年十二月二至り再ヒ越前福井中学校ニ職ヲ奉シ尋イテ同地商業学校ニ転」じた人（註21）。

なお、山田天籟も、後から福井へ来たのか、十二月十六日の『政教新聞』文苑に、王治本・山本小坡・土生笙東との分韻の作が載っているので、掲げておこう。

酌 山田天籟〔重光〕

興王黍園・山本小坡・土生笹東諸彦、分「月白風清」四字為韻、得風字

旅窓寒月影朦朧 旅窓の寒月 影 朦朧たり

欲破羈愁酒有功 羈愁を破らんと欲すれば 酒 功有り

欣得両三詩客到 欣ぶ 両三の詩客の到るを得たり

聯吟追歩古人風 聯吟して追歩せん 古人の風

おわりに

三十九年一月十五日の『富山日報』に「王黍園の新年作」という見出しで、次のような記事が載っている。

客冬富山に遊杖を留めし清客王治本^{わうじほん}老人はこの程丙午新年の作として越中詞壇の諸星へ寄送せし一篇、句法老成円熟洵に誦すべし左に掲ぐ

海外東風早報春 海外の東風 早く春を報^つげ

椒尊分韻到羈人 椒尊 分韻 羈人に到る

民生得享昇平福 民生 昇平の福を享くるを得て

国運相隨歲月新 国運 相隨い 歲月 新たなり

恰喜青陽逢吉午 恰も喜ぶ 青陽〔春〕 吉午〔縁起のいい午年〕に逢うを

遍伝丹簡賀元辰 遍く丹簡を伝えて 元辰を賀す

光陰客裏猶殘臘

光陰は客裏 猶お残臘（農暦の年末）

旦向梅檐索笑巡

旦しほろ向梅檐に笑みを求めて巡らん

在横濱 王治本

頸聯・頷聯は三十八年の日露戦争の勝利を寿ぐとともに、三十九年が一層よい年になるようにとの願いを込めたものである。これに次韻した作品として、筆者は島田湘洲のものと土居香国のものを見出しているが、湘洲の作「明治卅九年丙午新年作、次韻王漆園見寄詩却贈」（『湘洲詩鈔』四十丁）は、戦勝の喜びを主題としたもので、王治本に対する気持ちは込められていない。これに対し、香国の作『仙寿山房詩鈔』卷三）は北陸を離れた王治本を「寄懷」するもので、それを最後に取り上げておこう。

片山津、総宜館、養痾、寄懷清人王彰園治本、游在張勢間、用其新年見懷詩韻

日対湖山晴雨春

日に湖山に対す 晴雨の春

温泉幽境養痾人

温泉 幽境 痾を養う人

夜眠拚夢思君到

夜眠 拚しいて夢みて 君の到らんことを思い

曉浴振衣疑骨新

曉浴 衣を振るいて 骨 新たならんかと疑う

松密八琴吟画閣

松 密しげくして 八琴 画閣に吟じ

月明双鑑醉良辰

月 明らかにして 双鑑 良辰に酔わん

燕臺風雪旗亭別

燕臺 風雪 旗亭に別れしとき

回憶乞詩紅袖巡

回憶すれば 詩を乞いて 紅袖 巡れり

「八琴」「双鑑」には、それぞれ「八琴、尾張勝地名」「伊勢二見浦、一称双鑑浦」との自注がある。香国は加賀の片山津温泉で病を養いながら、尾張・伊勢を旅する王治本に思いを寄せたのである。王治本は張・勢の後、四度目の越前訪問を行い、再び土生笙東らと交流し、三河を経て、秋に入る前に横浜に帰る。その間の彼の足跡と詩文交流の様子については、既に拙稿をものしているのので、ご参照いただければ幸いである。^(注7)

注

- 1 十五、十六年のこの地域における詩文交流については、拙稿「明治十五年 王治本の旅と詩文交流―旅立ちから東海道を経て越前滞在まで―」（『武庫川国文』第八十号、二〇一六年）及び「王治本 明治十五、六年の北陸漫遊と詩文交流―加賀・越中・能登・越前―」（『日本語日本文学論叢』第十二号、二〇一六年三月）で紹介した。
- 2 拙稿「王治本 明治三十八年秋 金沢における詩文交流」、『武庫川国文』第八十三号、二〇一七年十月。
- 3 「●」で示したのは、判読しがたい文字（マイクロフィルムのため）。以下、同じ。
- 4 『明治大正昭和 日本德行録』上巻（読売新聞社、一九二九年）七九五頁。
- 5 銷夏湾は松川（旧神通川）沿いにあった貸座敷、料亭。川崎源太郎著兼印刷発行『中越商工便覧』（二十一年）三十五・三十六頁に「会席御料理／富山惣曲輪／銷夏湾」とある。
- 6 この後に一字脱していると見られる。
- 7 富山県大百科辞典編集事務局編『富山大百科事典』（北日本新聞社、一九九四年）上巻四〇三頁。
- 8 亀谷龍二・橋米次郎編『越中古今詩鈔』（光奎社、一九二六年）四十七丁。
- 9 水間直二「金山従革翁について」（『高志人』第三十七卷十月号、一九七二年）。富山新聞社報道局編『越中百家』上巻（富山新聞社、一九七三年）二十五～三十頁「豪農金山家（岩峠寺）立山とともに生きた」。
- 10 土居通豫「富山奇遊」（『日乗七種』所収）五月十四日の条。なお、「梧竹」は書家中林梧竹（一八二七～一九一三）のことと思われる。
- 11 この「之」は衍字かと思われる。
- 12 この「屢」は「屢」の誤まりではないかと思われる。

13 『越中古今詩鈔』坤二十一二丁。

14 同書坤四丁。

15 木蘇岐山著、門生石野徹註、小倉正恒校刊『五千卷堂集』（小倉正恒、一九三五年）巻頭所収の小倉正恒「岐山先生事略」。

16 『富山大百科事典』上巻八〇六頁。

17 『越中古今詩鈔』坤二十九丁、「富山大百科事典」上巻一八九―一九〇頁。

18 「城中に風雨が満ちて、最早九月九日の節句が近づいたの意」を表す「滿城風雨近重陽」の語（『大漢和辭典』巻七、一九九頁）を踏まえる。実際はこの日が重陽節のはずだが。

19 内山松世編輯兼發行『湘洲詩鈔』（一九二五年）。

20 葛生能久『東亜先覚志士記伝』上巻（黒龍会出版部、一九三三年）によれば、「偶々明治二十八年十月閏妃事件の起つた際、彼は第二大隊長として光化門を警衛してゐたが、親露党たる聯隊長洪啓薫が来つて拔劍を揮つて李斗璿に迫り、事態正に危きに瀕した時、日本士官某が来つて号令一下兵士をして洪啓薫を撃たしめ、その斃るゝを見て我が志士の一団は愈々大事を決行するに至つたのである。この事件の爲め彼は身を置くに所なく、辛ふじて釜山に脱れ、髪を斬り服を変じて日本に亡命し、暫らく京都に潜んでゐたが、後ち刺客の難を避ける爲め武田範之に伴はれて日本内地を周遊し、明治三十年に至り東京に居を構へて、日本語の習得、軍事殖産等に関する研究に従ひ、其間得意の詩書を以て日本各地を遊歴し、交り有る志士の結んだ」という（二二〇頁）。この年の十一月三日の『富山日報』には「講習會員懇親会」という見出しの下、次のような記事も載っている。「当市の韓国語講習會員発起となり今三日午後五時を期し当市八清楼に於て天長節奉祝に併せて講師李斗璿を招き相互の交情を厚くせんが爲め懇親会を開くが出席者一同へは李斗璿より潤筆一葉つ、特に芳志として寄贈する筈なりと」。

21 前掲小倉正恒「岐山先生事略」。石川県『石川県史 現代篇(2)』（一九六三年）一一五二頁。

22 『越中古今詩鈔』坤十二丁。

23 大西金陽については前掲拙稿「王治本 明治十五、六年の北陸漫遊と詩文交流―加賀・越中・能登・越前」七十二頁。

24 なお、この年の十一月二十九日の『北陸政報』の「秋山亭に於ける揮毫会」という見出しの記事に「富山市の中谷有竹、島田神水等発起となし再●日富山市秋山亭に目下滞富中なり大西金陽画伯を招きて揮毫会を開きしが（下略）」とある。「●」の部分は「昨」の字の可能性がある。然りとせば、十一月二十七日の時点でも金陽はなお富山に滞在していたことになる。

25 『越中古今詩鈔』坤三十三丁。

26 同書坤二十一丁。

27 土居通豫「富山奇遊」。

28 『越中古今詩鈔』坤二十二丁。三十七年二月十二日の『高岡新報』には「橘詩竹氏は岐山門下の一秀才なり」とある。

29 かつての出会いを証する作品としては、例えば岐山が小川果斎の名で編集していた、十八年、大阪で創刊の『熙朝風雅』（電花吟社）第七集（十九年）所載の王治本作「乙酉六月、客游浪華、訪小川果斎、話旧」詩、及び果斎作「乙酉夏日、重晤清客王黍園、話旧、兼送其游鎮西」詩などがある。

30 なお、「中」は「あたる」を意味するときには去声の送韻であるから、他の押韻箇所と合わないと考えられるが、この点につき石野徹は清の胡鳴玉の説（『訂鵲雜錄』）に基づき、「余謂如中聖之類、必宜平声、若用中酒字、不妨平仄竝押」との見解を披歴している（『五千卷堂集』礼卷三、十七、十八丁）。

31 湘洲のこの作は『湘州詩鈔』に「十月十二日秋山亭席上即事、次韻王漆園」という題で収載されている。なお、起句の第五字を「浸」に作る。「酪奴」「森伯」は茶の別名。「玉泉子」は李白の「答族姪僧中孚玉泉仙人掌茶 并序」に見える、玉泉寺の僧玉泉真公のことか。「陶大尉」は晋の陶侃のことか。「垂」はこゝでは、その名を残す意か。

33 なお、土居香国の「富山奇遊」には次のようなことが記されている。すなわち、彼が翌三十九年五月十六日、梅迂を訪うたところ、梅迂は「秋山亭茗譚画卷」なるものを出して、詩を乞うた。そこで香国は五絶句を賦した。香国はそれらの詩句を記載しているのであるが、その第四首は「雲根妙趣米家遺、如意奇形四皓芝。茗筵何事佳話、詩伯文章画伯詩（雲根の妙趣は米家の遺、如意的奇形は四皓の芝。茗筵何事佳話伝われる、詩伯の文章 画伯の詩）」というもので、結句に「詩人王黍園作記、金陽画伯賦詩代跋」との自注を付けている。ただ、「秋山亭茗譚画卷」が、この「風雅会」の時の所産か否かは不明である。

34 拙稿「王治本 明治十五、六年の北陸漫遊と詩文交流―加賀・越中・能登・越前―」七十頁。

35 この「六」は「七」の誤りと思われる。なんととなれば、王治本が富山から金沢へ向かったこの年の十一月六日は、旧暦の十月七日に当たるから。

36 「倦翼禽」の語は明の王慎中（一五〇九―一五九）の「登江東城樓」詩に用例がある。

37 この「勝」は「深」の誤りか。

- 38 この二首に次韻した「乙巳晚秋次韻王漆園留別詩」と題する作が、『湘洲詩鈔』にある。
- 39 神田喜一郎編『明治漢詩文集』（筑摩書房、明治文学全集第六十二巻、二〇一三年）所収の中村忠行編「略歴」によると、海雪はこの年、「満韓塩業会社の創立を企てて渡満した」。
- 40 「七十二橋」は新潟を詠む詩文でよく使われる語。
- 41 筆者は二〇一七年八月末、新潟県立文書館で、『新潟新聞』をはじめ、当時の地方紙を閲覧調査したが、王治本の新潟訪問を裏付ける記事を発見できなかった。
- 42 『季刊墨スペシャル』第十九号（一九九四年）所載の芸術新聞社編「中林梧竹ビジュアル年譜」の三十八年の条に「歳末、北陸に遊ぶ。富山、金沢、大聖寺を経て（下略）」とある。
- 43 『敬字文集』巻十三（吉川弘文館、三十六年）。
- 44 北國新聞社出版局編『石川県大百科事典』（一九九三年）一一〇頁。
- 45 金沢市教育委員会新加能画人集成編集委員会編『新加能画人集成』（一九九〇年）一四二頁。
- 46 「俟公楼」は殿待楼のことだろう。
- 47 唐寅の生涯については内山知也氏『明代文人論』（木耳社、一九八六年）第五章に詳しい。
- 48 五嶽楼については、拙稿「明治十五年 王治本の旅と詩文交流―旅立ちから東海道を経て越前滞在まで」三十三、三十四頁。
- 49 王治本と山田天籟の師弟関係に関しては拙稿「王治本 明治三十八年秋 金沢における詩文交流」三十頁。
- 50 村上珍休『函峯文鈔』（吉川弘文館、四十一年）。
- 51 『石川県史 現代篇(2)』（一九六三年）一一五二頁。
- 52 永井荷風が「殺堂の門に遊んで其教を受けた人の中其名を討ね得たもの」として函峯と即山のことを述べている（岩波書店『荷風全集』第十五巻（一九九三年）所収「改訂 下谷叢話」第四十二、二八五―二八七頁）のが、ここに参考になる。
- 53 「丁丑春」は十年二月中旬から五月中旬にかけて。「殺堂山長」は鷺津殺堂（一八二五―八二）。「昌黎・子厚」は唐の韓愈と柳宗元のこと。「神波即山」の生卒年は一八三一―九一。「製局」は文章の構成。
- 54 明治七年の来日ということになるが、傍証がない。王治本自身は上引の「函峯文鈔跋」の中で丁丑（十年）春、来日したと述べている。
- 55 松原一城著、高木喜一著・編『真宗 安心邪正明治断概評 真宗 安心邪正明治断統餘』、二十四年十月。

- 56 戸沢春堂（福井市常盤木町）編『真理之暁』第二、日本道徳会本部（福井市常盤木町（孝顕寺内））、二十八年。
- 57 富田鷗波及びそのかつての王治本との交流については、前掲拙稿「明治十五年 王治本の旅と詩文交流―旅立ちから東海道を経て越前滞在まで―」及び「王治本 明治十五、六年の北陸漫遊と詩文交流―加賀・越中・能登・越前―」。
- 58 横山蘭洲およびその王治本との関わりについては、前掲拙稿「明治十五年 王治本の旅と詩文交流―旅立ちから東海道を経て越前滞在まで―」。
- 59 『随鷗集』第八編（三十八年五月）所収「墨田佳話」の「斜川吟社」と題する記事による。
- 60 借山翁を筆名の一つとした書画家斉白石（一八六四―一九五七）のことかもしれないが、そのように擬するには、次の冬心（金農）と時代の隔たり過ぎるのが難点。
- 61 この「奮」は「旧」（旧字体は「舊」）の誤りと思われる。
- 62 王治本は十五年の福井訪問時、富田鷗波とともに一乗谷を訪れ、その往復の問答や唱和の詩を記録した『一乗紀行』を残した。詳しくは前掲拙稿「明治十五年 王治本の旅と詩文交流―旅立ちから東海道を経て越前滞在まで―」。
- 63 青柳仙之助編輯兼発行『大正十一年編纂 内外福井県人士録（第壹巻）』（福井黎明雜誌社、一九二二年）三十七―三十九頁。
- 64 前川幸雄・水島直文「福井県関係現存披見漢詩集初探（第一稿）」（『福井工業高専 研究紀要 人文・社会科学』第十九号、一九八五年）二十五頁。
- 65 『藤島餘芳続編』から「北莊懷古（十首之二）」を転載しておこう。「藤島城辺馬不行、將星忽墮水西宮。使公肯聽宗昌語、好保南朝留此生。」（藤島城辺 馬 行かず、將星 忽ち墮つ 水西宮。公をして肯て宗昌の語を聴かしめなば、南朝を保ち 此の生を留む好かりしならん）。一三三八年閏七月、新田義貞は藤島の灯明寺で、斯波高経の軍勢と交戦中に戦死。この時、中野宗昌が退却するよう請願したが、義貞は「部下を見殺しにして自分一人生き残るのは不本意」と言って、聞き入れなかった（『太平記』）。その故事を詠んだ作。
- 66 『小坡唫稿』にはその他、王治本との交流の中で詠まれた作が七首記されているが、筆者の浅学のため判読できない。
- 67 この「討」は「詩」の誤りではないかと思われる。
- 68 この句は『易』繫辭伝上の「同心之言、其臭如蘭」を踏まえた表現。
- 69 「絹素」は書画を書くのに用いる白い絹。「竹平安」は太原府の童子寺の寺務が毎日、境内に生えている竹の平安を報じていたという『西陽雜俎続集』巻十所載の故事に基づき、家中は無事だとの知らせの手紙のこと。

- 70 拙稿「明治三十九年 王治本の 尾張・伊勢・越前・三河における足跡と文藝交流（下）」（『武庫川国文』第八十二号、二〇一七年）三十七頁。
- 71 岸上操編『明治二百五十家絶句』（博文館、三十五年）四一九頁。
- 72 拙稿「明治三十九年 王治本の 尾張・伊勢・越前・三河における足跡と文藝交流（上）」（『武庫川国文』第八十一号、二〇一六年）四十六頁。
- 73 三十九年の一月一日は、陰暦ではまだ年が改まらず、乙巳年の十二月七日。
- 74 前掲拙稿「明治三十九年 王治本の 尾張・伊勢・越前・三河における足跡と文藝交流（上）」、及び同（下）（『武庫川国文』第八十二号、二〇一七年）。

（しばた・きよつぐ 本学教授）